

子宮頸がん検診

毎年約1万人が発症し、約2,700人の女性の命を奪っている子宮頸がん。初期にはほとんど症状がなく、不正出血やおりものの増加などに気づいたときには、がんが進行していることも少なくありません。

患者数が最も多いのは30~40代ですが、20代の若年層にも急増しています。20歳になったら、2年に1回は子宮頸がん検診を受けましょう。検診でがんを早期発見し、早期治療ができれば、妊娠・出産も可能です。

子宮頸部細胞診 子宮頸部の細胞を専用の器具でこすり取り、顕微鏡で調べます。月経中や月経直後を避けて受診しましょう。

医師採取法

医師による内診のあと、子宮頸部の細胞を採取し、顕微鏡でがん細胞の有無やがん細胞の種類を調べます。



検査の流れ

- 1 問診票に、初潮年齢や月経の状況、妊娠・出産歴、閉経後の人は閉経年齢、自覚症状の有無等を記入する。
- 2 内診台に上がり、視診や触診により、腫れや炎症の有無、子宮の形状や大きさなどを調べる。
- 3 専用の器具を膣に挿入し、子宮頸部の細胞を採取する。
- 4 医療機関によって異なるが、おおよそ2週間後に検査結果がわかる。

国が推奨
20歳以上は2年に1回受診することを推奨しています。

メリット

- がんになる前の異常な細胞を見つけることができる
- 医師が目で子宮頸部を確認しながら採取するので、検査の精度が高い
- 視診や触診などで病変が疑われるときは、超音波検査や精密検査(コルポスコピー診)で詳しく調べられる
- 検査時間が短く、痛みなどの身体的負担が少ない

デメリット

- まれに出血が生じることがある

自己採取法

自己採取用の検査セットを用いて子宮頸部の細胞を専用のヘラやブラシでこすり取り、検体を医療機関等に提出します。

※細胞を的確に採取するのは難しく、精度が低いいため、医師採取法が推奨されています。



メリット

- 自宅等で気軽に行うことができる
- 検体を郵送で送ることもできる

デメリット

- 細胞を自分での確に採取できないこともあり、誤診率が高い
- まれに出血が生じることがある

プラス 30歳以上は一緒に受けておきたい HPV検査

子宮頸部の細胞を採って、子宮頸がんの原因であるHPV(ヒト・パピローマ・ウイルス)への感染を調べる検査です。

メリット

- 子宮頸部細胞診で採取した細胞の残りで同時に調べられるので、気軽に受けることができる
- 細胞診と合わせて受けることで、検査精度の向上が期待されている

デメリット

- 20代の若い世代では、リスクのない一過性の感染も「陽性」と判断される率が高い

「子宮頸がん予防ワクチン」について

子宮頸がんはHPVのウイルス感染が原因で起こるがんので、ワクチン接種により子宮頸がんの約半分を予防できるといわれています。世界保健機関(WHO)が推奨し、我が国でも、2013年度から定期接種の対象となりました。

しかし、ワクチン接種後の重篤な副反応発生の報告を受け、厚生労働省では積極的な接種勧奨を一時差し控え、ワクチンの有効性とリスクを理解したうえで接種を検討することを呼びかけています。